

天智・天武兩帝

田 辺 幸 雄

この二人の作者について私はそれぞれ四十枚・六十枚程の作家論を書いたことがある。ともに単行本「初期万葉の世界」に収めたから、くわしくはその稿を御参照願えとありがたいが、今限られた枚数でこの兩帝を、という編集部の御指命を受けたので、ここでは兩天皇を対比的に見るいとなみを中心に据えて、責任の一端を果したいと思う。

15 天智天皇 天武天皇 兩帝

兩帝は齊明天皇を父とし皇極天皇（齊明天皇）を母とする兄弟で、その間に孝徳天皇の皇后となつた間人皇女をはさんでいる。年齢にはいろ／＼ややくしい問題があるが、天智天皇の享年を四十六歳（六七一年）とし、天武天皇をその四、五歳下と見るあたりが真に近からう。兄天智天皇は中大兄皇子時代から政局推進の要点に立ちつゞけたが、そのはなやかな活躍に蔽われて弟大海人皇子（天武天皇）の存在はまったく目立たなかつた。たとえば孝徳天皇白雉四年（六五三）、中大兄は孝徳天皇に倭の京へ還らうと建言して納れられぬと知

るや、天皇一人を難波に残し、天皇の眷族ごとくをひきつれて倭へ移るといふ暴挙をあえてするが、その時大海人皇子も、しかたがないと思つてか、兄のあとについて行動している。また白村江敗戦の翌年であるが、天智天皇三年（六六四）、天皇はこの弟に命じて冠位増換のことをなさしめていた。この時も兄の命を受けて大海人は滞りなくことを執行したのであろう。

しかし天智天皇の晩年になると、二人の間は必ずしもこれまで通りではなかつた。むしろ対立といつてしかるべき状態が、いつとはなしに醸成されていつた。このことが顯著な三つの波頭となつて現われた。ということが出来る。その第一は、鎌足伝が書き残してくれた浜棲置酒の日のできごとである。天智天皇七年（六六八）正月、正式の即位があつて後間もなくのことであるが、天皇は群臣を召して湖畔の棲に酒宴を開いた。宴たけなわの時、大海人はいきなり「以三長槍一刺三貫敷板」といふ突飛な行爲に出た。天皇は驚き且つ怒つて

弟をとらえ、殺そうとしたのであるが、藤原鎌足に固く諫められ、ようやくにして思いとどまつた。壬申の乱に水際立つた指揮ぶりを示して国民ごとごとくを驚嘆させ、即位後十四年間の治世に波一つ立たしめなかつた大人物大海人皇子が、こういう荒々しい行為を思わずも演じてしまつたということ、その背後にやほど久しきにわたる憤懣の堆積を考えねばならぬと思う。しかも兄はこれによつて直ちに弟を殺そうとした。たとえこのことに一応の結末がついたにせよここまで来れば二人の対立は深刻なものとなつていたと見なければならぬ。双方が息をはあく／＼させながら睨み合いつつ退いていつたようなところが、この事件にはある。

その第二は同じ年の五月五日に行なわれた蒲生野遊獵の日の、額田王・大海人皇子の歌の贈答である。「野守は見ずや君が袖振る(二二〇)」と案じつつもわく／＼した額田王に答えて、大海人は「人妻故にわれ恋ひめやも(二二一)」と衷情を吐露している。兄天智天皇の眼を盗んで贈答は行なわれたのであるから、文芸の世界のできごとに置換えられているとはいふものの、ここにも明らかに底流としての対立が存するわけである。

こうして持ち越された歩み寄ることのない対立状態は、第三の波頭たる天智十年(六七一)十月十七日の病床会見にまで二人を引きずつてゆく。この会見は天智紀・天武即位前紀

共にこれを記し、その間に小異があつて興味がひかれるが、ここでは事の経過を主として天武紀によつて略述しよう。十七日、天智天皇は病の甚しきを知り、蘇賀安麻侶を遣して大海人を殿に呼び入れた。安麻侶は平素大海人に目をかけられていた男だが、この時ひそかに大海人を顧みて「有意而言矣」と言つた。大海人はここに於て「疑^ヒ有^ル二^ニ隠^レ謀^ル。而^{シテ}憤^レ之^ヲ」というわけである。大海人の出かた一つによつてはどういう恐ろしい結果が生ずるかはかられぬ、と安麻侶は見てとつたのである。病室の裏側には命令一下飛び出す用意をしていた刺客の幾人かはきつといたに違いなかるうと思う。天皇は天位を大海人に授けようと申出た。大海人は答える。私は不幸にして多病です、到底社稷は保ち得ません。天下は皇后にお渡しなさるがよ、大友皇子(天智の実子)を儲君となさつて下さい。私は出家して陛下のために功德を修めましよう、と。すると天智天皇はすぐこの申出を聴^キした。大海人は即日出家して法服を着、これまで私有していた兵器を悉く役所に納めた。以上が十七日のこと。そして十九日にはもう吉野へ向つて出発している。この日近江朝の、即ち天智天皇方の重臣蘇我赤兄、中臣金、蘇賀果安等はこれを送つて菟道までゆき、そこから引返した。その時である。「或曰^{ハク}。虎著^ク翼放^テ之^ヲ。」という言が放たれた。三人の中の誰かが他を顧みて言つたのである。この夕べ、大海人は南大和の島ノ宮に一泊、翌二十日山

を越えて吉野へ入つたのである。

兄弟の対立が表面化した以上三つの場面に於て、歌人としての天智・天武兩帝はどうふるまつたか。兄天智天皇は、一口にいつて何もしていない。

香具山は 敵火を愛しと 耳梨と 相争ひき 神代より
斯くにあるらし 古昔も 然にあれこそ 現身も 婦を

争ふらしき(一一三)

香具山と耳梨山と鬪いし時立ちて見に來し印南国原(一四)

渡津海の豊旗雲に入日さし今宵の月夜清明こそ(一一五)

妹が家も継ぎて見ましを大和なる大島の嶺に家も在らましを(九一)

万葉に残された以上の四歌に、齊明紀の

君が目の恋しきからに泊てて居て斯くや恋ひむも君が目
を欲り(紀一一三)

を加えたものが、天智天皇の全作品である。わずかな歌数に基づいてものをいうのは気がひけるが、これらの諸歌が弟との深刻な対立というようなことは全く無関係な所に成立していることは誰が目にも明らかであろう。三山歌の結句「現身も婦を争ふらしき」は、額田王をめぐる弟大海人との婦争いを意識して歌つてしていると、これまでしばしば説かれて來

た。果してそういう唯一つの問題に焦点を決めてしまつてよいかどうかさぶる疑問だと私は思つているが、假に一步を譲つてそうだとしたとしても、この長短一連の歌が、そういう人対人の問題に中心を置かず、山どうしの三角関係という古代らしい大まかな伝説そのものへの興味を中核として成立していることは疑いを容れない。一四の短歌の存在からもこのことは証せられるし、一五と思ひ合わせると、播磨あたりで阿菩大神の伝説をきき、そこで日頃見なれていた三山を思ひ、伝説への、感興とみに至つて長短一連(一一三・一四)を成し、ふりかえつて海の上の雲のきらきらしさに一五の短歌を成したか、というこれまでの推測はほぼ真に近く、且つこのことを側面から助けてくれると思う。だからこそ「争ふらしき」というような、淡い、上品でおだやかな表現にその所がかざられているのである。弟との対立にかぎらず、他の人々との深刻なぶつかりあい——それは天智天皇の場合特に多かつたわけだが——にも、これらの歌はかわつていない。鏡王女への歌(九一)も激情をぶつけるようなものでなく、さらつとしたスマートさの如きものに縁取られている。母齊明天皇の死を悲しむ紀一二三は、別の歌が假託されたかという疑いも若干あるが、一応天智天皇のものとして見るとき、これが烈しい慟哭のうめきでなく、亡き母を偲ぶ悲傷の情緒にやわらかく浸つている、少し極端に言えば快く目をつぶつ

ている、ような趣の歌であることを私は感知する。

つまり天智天皇の場合、歌は自身が経験する激情や深い感動の嵐といったものとは無関係な所に於てはじめて成立しているようである。時に閑暇を得て風流意識に目ざめる時、という程はつきりはしないかも知れないが、ほどそれに近い状態になつたとき歌が創られる、といつてよいのである。天智天皇はそういう型の歌人であつた。

弟天武天皇はどうか。上述三つの波頭の中の、第二第三の場合に彼は力強く歌つている。その代表歌をその二つの波頭に於て発している。

紫のにはへる妹を憎くあらば人妻故に吾恋ひめやも

(一一一)

今この歌の本質を縷々と説く余地を持たない。たゞこの時三十八、九歳の大海人が皇太弟という身柄に於て、今は兄天智の妃としてしか眺め得ぬかつての日の恋人額田王を、熱く思いつつ、爆発しそうな己をぐつと抑え、しかも恋うる心の叫びは短歌という文芸型態の中に力強く打出している、というこの歌の根幹を指摘するにとどめよう。はげしく力強い気魄の文芸たることをいうにとどめよう。兄の大きな圧力をいやという程意識しつつ、その苦しみの中でこの迫力ある作を彼はなしたのである。

み吉野の 耳我の嶺に 時なくぞ 雪は降りける 間な

くぞ 雨は零りける その雪の 時なきが如 その雨の間なきが如 隈もおちず 念ひつつぞ来る その山道を

(一一五)

この長歌は上述十月二十日の吉野への山越えを扱つてゐるらしい。その時の詠か、後にこの十月二十日のことを回想して歌つたか、その辺ははつきりしない。この歌は巻一の天武天皇の御代の部におかれてゐるので、そのことにこだわれば後者の如く解すべきかと思われ、その場合最後から二番目の句は「念ひつつぞ来し」と過去形に訓ずべきものかも知れない。耳我の嶺は古来不明とされてきたが、私注が多武峰略記を傍証として今日の竜在峠附近をこれにあてたことは十分高く評価されてよいと思う。この比較的短い長歌にみんぎる力強さを私は見落せない。しらべに張りがある。ぐんぐん盛りあがるものを内部に蔵している。旧曆十月二十日はすでに冬であつた。峠に近づいた時、はげしい北風は大海人たちの背に雨まじりの雪をふきつけたであらう。兄天智を含めて近江朝幹部たちの自分に対する冷たい仕打を思い、自分が徹底的な退避策をとつたことを反省し、又二十六年前にこうして吉野へ入り程なく謀反の名の下に葬り去られた古人大兄皇子のことを思い、思い乱れ、又一方に不敵な期待をもいだきつつ、大海人は、尾根に沿う峠道を南へ進んでいつたことであらう。本年三月二十四日、つい昨日のことだが、リュック

をかついだ私は一人島の宮の地の朝発つてこの耳我の嶺を越えてみた。多武峰神社の門の所から、冬野という部落をすぎ、道は峠へ細くつづく。冷い曇り日の風は私の背中をぶつように吹きつけた。時に雨がぱらつきそうに、それが雪に変わりそうにもなつた。北側へ出た尾根を左右にまきながら少しづつ高度を高めてゆくのだ。幾曲りしながら山腹の上部をぬうこの細道、ここを大海人たちは口をつぐんで越えたのだ、この北風の吹きつける雨雪よりもつと冷いものを、近江朝に感じて彼等は吉野の奥へ分け入つて行つたのだ、正に「念ひつづぞ来るその山道を」だつたのだ、と私は思いつつ、一人いらない道を登つていつたのである。

閑話休題。このすぐれた歌には類歌がいくつもあり（二六・三二九二・三二六〇）、そこに問題があるが、一切省略させていた。だ。

淑^よき人の良しと吉く見て好しと言ひし芳野吉く見よ良き人よく見つ（二七七）

吾が里に大雪ふれり大原の古りにし里にふらまくは後（二〇三）

天武天皇の歌は以上ですべてである。兩歌共に即位後のものと見られ、好ましい作ではあるが、歌としては軽い。ここにことごとしく論ずるほどのものではない。即ち天武天皇の代表歌は既述の二首にある。自らの生命がはげしくゆすぶら

れ、激しい感動がわが身をつつみ、心の強くわきかえつた、そういう時に、天武天皇は、それにふさわしい、力強く烈しい全身的な歌を詠み出している。天武天皇が己を最高度に発揮したのは、何といつても壬申の乱を勝ち抜いた時であろう、考えてみれば、兩代表歌が創られた蒲生野の場合も耳我の嶺も、この大乱を後にひかえた、天皇雌伏の時であつた。時日の差こそあれ、その爆発点たる壬申の乱直前の、最も苦しく最も辛かつた、たぎりにたぎろうとする激情を抑え抑えしていた時期であつた。人間としての全エネルギーが、二つの歌に爆破口を見つけようとしているような状態で、兩歌は発せられている。ここが天智天皇の場合とはなはだしく異なるわけである。

この兩兄弟の間に挟まれ、はじめ天武に愛されて十市皇女を生み、後天智後宮に拉し去られたらしい額田王は、近江天皇（天智）を思^{しよ}んで「君待つとわが恋ひ居ればわが屋戸の簾うごかし秋の風吹く（四八八）」と歌い、蒲生野では天武の動作を案じつつ「茜さす紫野行き標野^{しほの}行き野守は見ずや君が袖振る（二〇）」と贈つた。二人に愛を感じているように一応は見える。しかしよく見よう。前歌の恋ひ方はどうか。「恋ひ居れば」と確かに言つてはいる。だが一首をつつむものは決して恋情の激しさではないのだ。待つ恋の情趣である。秋風に夫を恋うるといふ、一つの風雅的境地である。夫を思うより

もむしろ身にしみて静かに秋風の音を聞いているのだ。後の歌では恋うという如き主観句は一つも使っていない。しかも「紫野行き標野行き」と大海人の動きを敍しつつ同時にゆれうごく己の心のはずみを見事に現わし、「野守は見ずや」という殺し文句によつて気遣わしき、愛情、スリルその他諸々の沸き返る思いのたけを、ぎゅつと締めあげているのである。すなわちこの歌に作者は己の全生命を燃やしているのだ。そこが同一作者のものでありながら、本質的にまるで違っているのである。

人は誰でもおのずから相手に合うように応待する。額田王も、歌を風雅の境地に於て作る天智天皇に対しては、自然とこうした待恋の情趣、秋風の情趣によりかかつて作歌した。そして秋風の中に「吾が恋ひ居れば」と歌うのが精一杯の表現で、それ以上を言えば嘘になつたわけである。激情の作者天武に対しては違ふ。表はなにげなく見える言葉の中に、あらゆる情熱を深く含ませ、女のいのちを滴らせたようなこの名歌をこちらから歌いかけている。この額田王の処し方の中に、天智・天武両帝のそれぞれの特質がまことにはつきりと示されている、といつてよさそうである。

——一九五七、四、一一——

田辺幸雄 著

初期萬葉の世界

A 5 上製 ¥七七〇 下三〇

はげしく転変する古代史の渦のさ中から、若さの陰に一沫の物哀しさを湛えた初期萬葉の秀歌は生れ出る。周密な作家論と史的展望を具備した清新潑刺の研究書。

【内 容】

初期萬葉の世界―初期萬葉の側面(記紀歌謠の様相)―
大化改新から壬申の乱へ―初期萬葉の作者たち
附 録・天智天皇の年令を中心にして初期萬葉年表

久松潜一監 要説日本文学史 辛四三〇 下三〇

風巻景次郎著 新古今時代 辛九〇〇 下四〇

風巻景次郎著 日本文学史の周辺 辛五三〇 下三〇

犬養孝著 万葉の風土 辛五六〇 下三〇

図書目録呈

東京都文京区春木町二ノ二三
振替東京 八七八二

塙 書 房